

オープン市場短信 (2011年10月)

2011.10.12

◆ 9月のCP市場動向

9月のCP新規発行額は、約3兆5200億円で、期落ち（約5兆1000億円：当月発行分含む）を大幅に下回る結果となった（除く、相対発行・金融機関発行CP・ABC P）。企業の間接決算期末での有利子負債圧縮目的等で資金需要が弱まり、月末発行残高は前月比1兆5,810億円減少し14兆4778億円に止まった。

一般事法では、鉄鋼が前月比6730億円の大幅減少、他業種も軒並み減少する動きとなった。ABC Pのみ、期末要因から前月比3033億円増加し、2兆円台に復活した。

発行レートの推移としては、9月も積極的な運用ニーズが続き、前月比弱含み地合いでの動きとなり、多くの銘柄で底値を試す動きとなった。日銀のCP買入オペ効果もあって金利のフラットニングが進み、銘柄間格差も殆ど生じない状況となっている。

新発（3M）物の発行金利は、最上位銘柄（a-1+格）で0.110%～0.118%、一般事業法人（a-1格）で0.109%～0.125%、その他金融銘柄（a-1格）では0.110%～0.140%であった。

【格付け別の発行レート】

9月のCPレートレンジ

(単位 %)

格付	1ヶ月	2ヶ月	3ヶ月
a-1+(オペ適格)	0.105% ~ 0.113%	0.105% ~ 0.116%	0.110% ~ 0.118%
a-1(オペ適格)	0.107% ~ 0.115%	0.109% ~ 0.117%	0.109% ~ 0.125%
a-1+(リース銘柄)	0.105% ~ 0.109%	0.107% ~ —	— ~ —
a-1(リース銘柄)	0.109% ~ 0.121%	0.110% ~ 0.120%	0.110% ~ 0.140%
a-2	0.114% ~ ケ0.25	0.124% ~ ケ0.35	0.111% ~ ケ0.50

《CPオペ》

CP等買入オペは、13日と22日に2回入札があり、オファー額は各回3千億円にて実施された。何れの応札額も前月とほぼ変わらない水準で、按分・足切りレートも前月24日実施分から横這いで推移した。9月末償還のCP持込が多かったためか、月末残高は1兆4643億円（前月比2498億円減）に止まった。

《ABC P》

ABC Pは、決算期末要因で2兆円台に復帰したが、前年比2679億円の減少となっており、やはり縮小方向に歯止めはかからない状況である。

日銀(資産買入等の基金)によるCP買い入れオペ実績

(単位:億円)

実施日	実行日	オファー金額	応札額	落札額	按分・全取 利回り較差	平均落札 利回り較差	按分比率
9月13日	9月16日	3,000	5,833	2,939	0.006%	0.007%	86.5%
9月22日	9月22日	3,000	5,580	2,933	0.006%	0.007%	58.0%

(注) 下限利回り(年0.1%)からの利回り較差方式

《短期社債残高》

業態別残高推移を見みると、前月比でABC Pが11.58%と増加したほかは、一般事法が28.50%、その他金融法人が5.05%の減少、金融機関が2.88%とそれぞれ減少した。

9月の新規発行企業は無く、通算の発行企業数は508社で変わらず。月末時点における発行登録(証券保管振替機構)企業数は、491社であった。

【業態別残高内訳】

(単位:億円)

業 態	9月末残高	8月末残高	増減
一般事法	38,024	53,178	▲ 15,154
その他金融	50,225	52,895	▲ 2,670
金融機関	34,352	35,371	▲ 1,019
(政府系金融	410	570	▲ 160)
(銀行等	13,534	14,840	▲ 1,306)
(証券	20,408	19,961	447)
ABCP	22,177	19,144	3,033
計	144,778	160,588	▲ 15,810

(注:買入消却分含む)

《CP現先市場》

現先(S/N)レートは、月中を通じてほぼ安定推移し、先月同様0.105%程度の出合いとなった。日銀の潤沢な資金供給効果もあって、期末越えでの波乱要因も見られなかった。

◆ 10月のCP市場動向

10月中のCP償還額は約2兆6400億円で、前年同月の償還額(約2兆8700億円)を下回っている(除く、ダイレクトCP・金融機関発行CP・ABC P)。

発行市場の動きとしては、決算期末で月末残高を落とした鉄鋼銘柄を中心に復活発行が月初から活発に行なわれており、今月の発行は期落ちを上回るであろう。月末残高は、15兆円台になると思われる。

日銀は、7日に“金融政策決定会合”を開催し、現状維持を決定した。日銀は、8月に一段と強化した金融緩和措置のもと、CP等金融資産の買入等を着実に推進している。また、実質ゼロ金利政策を継続していくとしており、潤沢な供給姿勢は今後も変わらないだろう。従って、CPは金利のフラットニングが進み、銘柄間格差も殆ど生じることなく推移して行くこととなろう。

5日の日銀短観において“CP発行環境に関する判断指数”（DI）が公表された。東日本大震災の影響で混乱が残っていた6月調査に比べ、5ポイント改善し、マーケットが落ち着きを取り戻していることが明らかとなっている。

今月の発行レートは、運用ニーズが依然として強いことから、底値を試す相場に変化はないだろう。一般事業法人（a-1格）3M物では、0.100台半ば～0.110%台前半、その他金融では0.11%～0.14%割れを予想する。

《CPオペ》

今月も、13・25日の2回のオファーが予定されている。オペレート水準は、新発物の発行減少やレート低下もあり、前月よりもやや弱含み、利回り較差は0.004%程度を予想する。9月30日、日銀は11月のオペのオファー日程を発表し、11月は3回のオペの実施となった。9月末残が1兆5千億円を割りこんだことや、オペレート水準が中々低下しないことに対するの処置と思われる。今月末残は、1兆7～8千億円程度となると思われる。

《CP現先市場》

日銀は、今月もその潤沢な資金供給姿勢を維持し、インターバンク・レポレートは落ち着いて推移するだろう。現先レートについても、前月同様横ばい圏内での出会い（0.09%台後半～0.10%台半ば）を予想する。

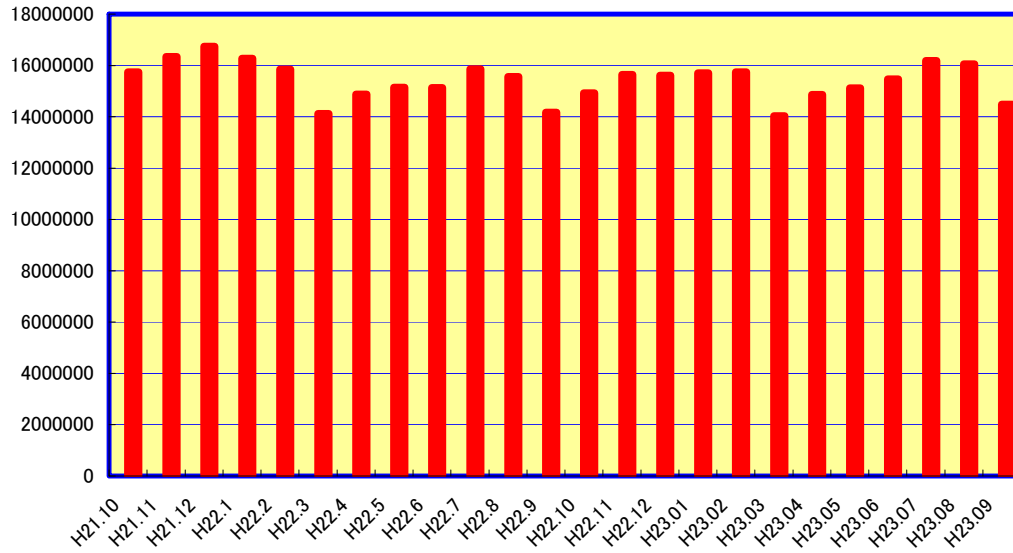
参考資料

短期社債月末残高

(22年10月～23年9月)

発行登録企業：491社（発行実績あり508社）

(過去2年間の残高を表示)



9月末発行残高ベスト20

9月末発行残高上位20社

(単位:百万円)

	発行企業名	9月末残高	8月末残高
1	三菱UFJリース	787,400	800,900
2	三井住友ファイナンス&リース	666,900	678,400
3	コンチェルト・レシーバブルズ・コーポレーション	624,280	590,110
4	東京センチュリーリース	577,700	589,900
5	三菱UFJモルガンスタンレー証券	470,200	492,300
6	大和証券キャピタルマーケット	429,480	381,980
7	みずほフィナンシャルグループ	405,000	480,000
8	みずほ証券	394,800	387,400
9	野村証券	383,000	369,000
10	エイペックス・ファンディング・コーポレーション	373,830	313,820
11	アルカディア・ファンディング	369,630	351,350
12	クレディ・アグリコル銀行	356,200	408,600
13	興銀リース	333,000	333,000
14	JXホールディングス	322,000	406,000
15	芙蓉総合リース	262,600	295,100
16	JA三井リース	255,500	253,000
17	東芝	252,000	379,000
18	日本電気	237,000	169,000
18	シャープ	237,000	222,000
20	オリックス	212,600	233,000

参考出所 (株)証券保管振替機構

本資料は投資環境等に関する情報提供を目的として作成したものです。本資料は投資勧誘を目的とするものではありません。有価証券等の取引には、リスクが伴います。投資についての最終決定は、投資家ご自身の判断と責任においてなされるようお願いいたします。当社は、いかなる投資の妥当性についても保証するものではありません。記載された意見や予測等は作成時点のものであり、正確性、完全性を保証するものではなく、今後予告なく変更されることがあります。

上田八木短資株式会社

登録金融機関 近畿財務局長(登金)第243号

大阪本社 〒541-0043 大阪府中央区高麗橋2丁目4番2号

東京本社 〒103-0022 東京都中央区日本橋1丁目2番3号

加入協会 日本証券業協会